
空白のふたり

Lna

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白のふたり

【Nコード】

N9197W

【作者名】

Lna

【あらすじ】

大切なおばあちゃんが死んでしまって、残されたふたり。血が繋がっていないことから、小さな恋の蕾が開くか…

プロローグ的な（前書き）

どのタイミングで投稿できるかわかりませんが、時間があつたらちよこちよこ書いていきたいです。

若干暗めになってますが、日常は明るいのです。
ドタバタする予定です。

プロローグ的な

恥ずかしながら。

自分はおばあちゃんっこである。

それも血のつながりがなくても。

堂々と胸を張って言えるだろう。

だって自分は、おばあちゃんと海羽みうと生きてきたのだから。

初瀬はつせりお罹麻はとても賢い少年だった。

また、その中性的な美しさと儚さ、その幼さからは考えられない聡明さ。

それらを持ち合わせていた。

しかし罹麻の両親は、息子の才能よりもお金のほうが欲しかったらしい。

とある大学の次世代のための有能な子供を集めていた研究グループとやらの簡単に親権を渡した。

金額は三千万だったと思う。

記憶が確かではないので多少盛っていたりするだろうが、自分の金額なんて知ってどうなるものでもない。

結局、自分がその大学にいたのは十日間にも満たなかっただろう。自分は逃げ出した。

毎日毎日わけのわからない記号の意味を覚えさせられ、知らない言語で話しかけられ、理解が遅れると懲罰がある。

懲罰も、食事抜きなどの可愛らしいものではなかった。

自分が憶えている中で最も酷かったのは白い部屋に閉じ込められたことだと思う。

あの細菌一つなさそうな潔癖な部屋に一時間。

時間の感覚すら失っていく恐怖。

思い出すだけでも全身が粟立つ。

十日目の早朝に、逃げた。
もともとセキュリティは wasn't だったからか、簡単に逃げ出せた。
その後の計画も立てていた。
いや、その後の計画は失敗に終わるのだが。
少しは大人になった今ならわかる。
あのころは世の中を甘く見ていた。
そんな簡単に人が救われていいはずがないんだ。
まして与えられた運命から逃げてきたような人間なんて、救われた
だけで奇跡なんだ。

逃げ出して3日が過ぎた。
今思えば3日しか過ぎていないのだが。
空腹は限界だった。

今まで特に生活に困っていたことがないからか、ここまで空腹がつ
らいのかと正直驚いた。
人間は空腹で死ぬ。

知識としては持っていたが、実際体験してみるとつらい。
あと何日で死ぬんだろう。
そればかり考えていた。

雨が降れば1か月はもつとか、くだらないことばかり考えていた。
そして、自分の手もかすんで見えてきたころにばあちゃんに救われ
た。

「…あら？ 行き倒れ？ 大丈夫？」
少しかすれているがきれいな声が頭上から降りかかる。
わずかな意識の中でつぶやいた。

———た、…すけ、て

おばあちゃんと、義妹誕生。 (前書き)

さて、やっとたのしくなってます。
まだ過去編的な感じがね。

おばあちゃんと、義妹誕生。

目が覚めるとそこは天井だった。

そりゃ、寝てたんだから…。

目を何度かあけたり閉じたりする。

何も変わらない。

や、変わったら困るけど。

「あらあら起きたの？」

素敵なお婦人が自分を覗き込んでいる。

きれいなほどに色素の抜けた白髪、黒く澄んだ瞳、しわはありつつも艶やかな肌。

「えと、あの」

言葉が出てこない。

「お腹空いてるんでしょう？今ご飯作るから待っててね」

優しく微笑んでくれる。

なぜか安心した。

「おにーちゃん、おなまえは？」

子供の幼い声が聞こえる。

しかしあたりを見回しても誰もいない。

「おっ、おなまえは？！」

どうやらドアの向こう側のようだ。

恥ずかしいのか隠れたまま姿を見せようとしてくれない。

「罹麻だよ。初瀬罹麻」

「……………」

無言。

返事してよ…。

自分より年下に無視されるって思ったよりきついなー、などと考えているとあのお婦人がやってきた。

「へえ、罹麻くんっていうのね。ご飯、持ってきたから食べてちょ

うだい」

「ありがとうございます」

おずおずと礼を言って食事に手を付ける。

「おいしいっ…」

今までの食事はなんだったんだというほどおいしかった。

「あらまあ、私の食事をおいしいだなんて、よっぽどお腹が減ったのね」

ご婦人は可愛らしくクスリと笑った。

今まで食べなかった分を補うように、胃に流し込むように食べた。食べ終えて一息ついたところで質問された。

「それで雇麻くん、聞きたいんだけど、なんであそこに倒れていたの？」

それはいつか質問されると思っていたのでありのままを話した。

もちろん、売られた云々は飛ばして。

自分の売られた話なんて自分でしていい気分じゃない。

ご婦人は話を聞き終えると手を叩いた。

「行くところがないなら家に住むといいわ！やだ、孫がもう一人増えたみたい！海羽もお兄ちゃんができてよろこぶわ。ふふっ、そうとなったらいろいろ用意しなくちゃ」

少女のように騒ぎながら部屋の外に出て行ってしまった。

「海羽ちゃんっていうの？」

まだドアの外に隠れている女の子に声をかける。

「おにーちゃんは、いくつ？」

逆質問だった。

いや、別にいいけどさ。

せめて質問には答えてほしいかもな。

「11だよ。海羽ちゃんは？」

「き、きゅう」

「9歳か、2つ違いだね」

「……………」

もう無言がつらいんですけど。

ご婦人が帰ってきました。

何やらハイテンションです。

「さ、今日から罹麻くんはうちの子だよ！」

そんなわけで、おばあちゃんと義妹ができたようです。

おばあちゃんと、義妹誕生。（後書き）

てなわけで、あと少し昔話続きます。

もう少ししたら、ふたり暮らしが始まります（ニヤリ）

最期、そして現在。（前書き）

これで過去編終了です。

最期、そして現在。

おばあちゃんの家で過ごすようになって5年。
海羽とも兄弟的な関係を築き上げてきた。

「おにーちゃん、毛布とって」

「はい」

「おにーちゃん、ご飯はまだ？」

「今すぐ作る」

「おにーちゃん、本」

「どうぞ」

う、うん、兄弟的な関係を築き上げてきた。
主従関係とか思ったやつは勘違いだ。
俺たちは兄弟だ。

しかし、元気だったおばあちゃんも年々衰弱してきている。
数年前から医者に通ってもらっている。
その医者にはもう長くないといわれた。
それについては海羽も知っている。
そして、おばあちゃんも多分気が付いている。
気が付いていないふりはしているけど、早朝はいつも窓の遠くをど
こか寂しそうに眺めている。

この5年で俺たちは成長してきたはずだ。

そう思って、海羽も俺も口には出さないがかなりおばあちゃんがい
なくなってしまうことを不安に思っている。

俺たちふたりでは何もできない。

それは、おばあちゃんが床に臥せてから痛いほど理解しているつも
りだ。

海羽もやることはきちんとやっている。
俺もやることはきちんとやっている。

それでも、何かが欠落している。

何かはもうわかりきっているのだけれども。

それは、もうどうやっても戻ってこない。

おばあちゃんの病気は治らない。

おばあちゃんは、そのうち死ぬ。

わかってる。

それでも、その日はやってくる。

その日はなぜか早く目が覚めた。

なんだろう。

わかった。

海羽も起きてきた。

虫の知らせってこういうことなのかもしれない。

おばあちゃんは幸せそうに眠っている。

もう起きてこないけれど。

窓の外も眺めてないけど。

おばあちゃんは死んじゃった。

海羽も俺も口にはしない。

でも、理解はしている。

もうだれにも頼っていけない。

ふたりで生きていくしかない。

おばあちゃんの葬式は、俺と海羽とおばあちゃんの3人で行われた。
誰も泣かない代わりに、空は大泣きだった。

いや、雨のおかげで涙が見えなかっただけかもしれない。

葬式の夜はふたりで寝た。

向かい合って誓った。

ふたりだけでも、立派に生きていこう、と。

最期、そして現在。（後書き）

次からはふたり暮らしの開始です。
おばあちゃんの家で、どう暮らしていくのかしら…

自覚。(前書き)

仲のいい兄弟って憧れます。

自覚。

「おにーちゃん、おはよう」

目を開けると海羽が目の前にいた。

30？近づけばおでこが触れ合う。

それでも海羽は無防備に目をこすりながらあくびをする。

長い睫、透き通るような白い肌、美しく光る黒髪、すらりと伸びる長い手足。

女の子として必要なものはほぼすべて持っている。

「…おはよう」

今までならなんてことなく流してきた海羽の一挙一動が気になる。

「……………ここまで可愛い生き物だったか、コイツ…」

今はおばあちゃんがいない。

つまり家に二人で暮らしているわけだが、耐えられる自信はあった。いやむしろこんな妹にそんな気起こすかつーの、と思っていた。でも。

「……………もう自信なくなってきた…」

おばあちゃんがいないということで、監視してくれる人間が消えたのだ。

よく考えれば大問題である。

つーかなんで今まで気が付かなかったんだよ。

考え直すタイミングはたくさんあった。

もともと身寄りのない俺たちに行くあてはないが、それぞれ働いて家を借りるということもできたのだ。

それでも、おばあちゃんを忘れたくないということでの家に二人で残ったのだった。

しかし、いまさら後悔しても仕方ない。

海羽が俺から奪っていたタオルケットを…

「ちよっと待て、なんでお前ここにいるんだ？」

冷静になって考えれば海羽が俺の部屋にいること自体がおかしいんだよ。

ぽけっとしている海羽を揺する。

「うん、おにーちゃん、起きた？」

「いや、お前が寝てたんだが」

そう言って海羽をベッドから引きずりおろす。

「ああ、ダメ！ふとんー」

じたばたと暴れる海羽をひよいと抱え上げると暴れなくなっただが、代わりにもものすごい罵倒が心に突き刺さった。

「何してくれんのよ、この変態兄貴！重いんだからっ、ちょ、どさくさに紛れてどこさわってんのっ！おろして、おろせ、今すぐおろせ！」

「うっさい、耳元で騒ぐなっ、っーか俺はどこも触ってねー、濡れ衣だ」

「触ったよっ、お嫁に行けなくなっちゃうじゃない！！」

「へー、そんな風には思えなかったけどな」

「なっ、失礼な…、あるわよ！見えないかもしれないけど、あるのよ！！」

「どこだ？俺には触った限りわからなかったけどな」

「なっ、やっぱり触ったんじゃない！このっ変態！あっち行け！」

「だから、お前のその貧相な胸なんて触ったってわかんねーんだよ」

「ふざけんなし！おにーちゃんには罪悪感ってないの？！」

海羽の細い体を落としてしまわないように慎重に運ぶ。

海羽の部屋は俺の部屋の隣で作りもほぼ同じだ。

ドアを開け中に入る。

久々の海羽の部屋はまたいつそう女の子らしくなっていた。

海羽をベッドの上におろすと海羽はアメーバのようにぐでーんと横になる。

パジャマの襟から覗く鎖骨が妙に艶めかしい。

何故か頬が熱くなってきた。

耐えられなくなり視線をそらす。

「おにーちゃん」

昔のような海羽の幼い声が聞こえた。

ふいにそんな声が聞こえたので振り返ってしまった。

振り返った先には若干涙目の海羽がいた。

おばあちゃんが死んでしまってから毎晩泣いているのは隣の部屋から聞こえていたので知っていた。

しかし面と向かって泣かれるのは、これが初めてだった。

「なんでおばーちゃんは死んじゃったの？ねえ、なんで？いやだ、寂しいよ…」

泣き出した海羽を見て俺はひどく動揺していた。

どうすればいいかわからなかった。

いきなりのことだった。

ただ、目の前の大切な人を傷つけたなくて、傷ついてほしくなくて抱きしめた。

これは兄弟でも許される行動かはわからなかったけれども、今なら許される気さえした。

抱きしめて思った。

家族でなくとも、兄弟でなくとも、海羽は俺にとって大切な人間だと。

腕の中で静かに泣いている女の子はもう、女の子でなくてひとりの女性としてしか見られなかった。

俺は海羽を好きだと、自覚してしまった。

もし許されるのなら。

もし海羽に好きな人ができなければ。

もし俺のことを好きになってくれるのなら。

俺は海羽と生きていたい。

そう思った。

自覚。 (後書き)

なんだか話が飛んでいってますが、そのうち軌道修正します。
次からは海羽視点でいきます。

一緒にいたい。(前書き)

うーん、語りが幼いかもしれません。
仕方がないかな…。

一応十四歳の設定なんですけどね。

一緒にいたい。

好き。

好きなの。

だから、もっと一緒にいてほしい。

部屋でひとり呟いてみる。

たぶん隣の部屋にいるおにーちゃんは寝ている。

寝ていなくても、聞こえていてもいいけど。
すき。

なんで気づいてくれないの？

こんなにも私はあなたが好きなのに。

朝だって、精一杯誘惑してみたのに。

：魅力ないのかな？

私たちには兄弟と示すものもない。

ほかに親戚もいないのだから世間体だって気にしないでいいではないか。

なのになんでそんな修行僧みたいに無反応なの？！

いやになっちゃう。

そこにあったクッションを抱きしめる。

顔を埋めてぽつり。

「すきだよ」

伝わらない。

言葉にしていけないから仕方ないのかもしれないけど、少しは感づいてもいいんじゃないかな？

昔からおにーちゃんはあるまり表情を表に出すことはなかったけど、最近はましになってきたと思う。

私はおにーちゃん的笑顔に一目ぼれしたんだから。

おばーちゃんの家に来て、この家に来て半年たった夏の日のこと。
今でも覚えている。

私はその時夏風邪にかかってしまっていた。

おにーちゃんは無表情ながらも私を一生懸命看病してくれた。
その時の幼かった私は言ってしまった。

「おにーちゃん、かお怖い」

そのとき、おにーちゃんはごめんていった。

でも、ただのごめんじゃなくて。

「ごめん」

って、はにかんでいった。

そのあと、私は恥ずかしくて真っ赤になっちゃったんだけど、すごく素敵な、自然な笑顔だった。

ああ、こんな顔もできたんだ。

そう思うと、なんだかおにーちゃんが愛おしくてすごく好きって思えたんだ。

おにーちゃんは私のことをどう思っているんだろう。

ふたり暮らしになってからあまり一緒にいない。

おにーちゃんは部屋にこもってしまう。

だから一緒にいられない。

私としてはすごくさみしい。

よし。

心の中でつぶやいて改めて口にしてみる。

「勝手に部屋に入るくらいいいよね、二回目だし」

私はおにーちゃんの部屋の前まで行き、深呼吸をする。

かちやり。

ドアを開くとベットでおにーちゃんは寝ていた。

「仕事してると思ったんだけど…」

おにーちゃんは専門の知識がいるが家でもできる仕事をしている。
内容はよくわからないが、かなりの知識量が必要らしい。

一度聞いたことがあるがはぐらかされた。

使っている道具からして、絵描きか小説家だと思う。
鉛筆とスケッチブックと原稿用紙。

いったい何をしているのだろう。

今はスケッチブックにたくさんさんの羽が書いてある。

原稿用紙は白紙だった。

眼鏡を外していないので、仕事をしたまま眠くなって寝てしまった
ようだった。

電源入れっぱなしだし。

そう思ってスイッチを切る。

おにーちゃんは自分が思っているより格好良い。

ていうか世間一般から見てもかなりの美青年である。

年の割に落ち着いた雰囲気とさりと揺れる髪の毛。

よく考えて選んでいないであろう黒縁の眼鏡も顔にあっている。

小さいころからきれいな顔立ちをしていたが、今は一層磨きがかか
っている。

ベットで寝ているおにーちゃんの髪の毛に触れる。

そして撫でる。

男の子とは思えないほど艶やかな髪質で、かなり憧れる。

おにーちゃんは私の髪をきれいと言ってくれるけど、おにーちゃん
のほうがもっときれいだ。

「んう…、誰？」

「————やばっ

起きると思わなかった。

逃げようと思いい立ち上がると手首をつかまれた。

怒られると思っていた。

しかし驚きの一言がおにーちゃんの口から放たれる。

「待って…」

一緒にいたい。(後書き)

海羽みうがかなり幼くなっちゃいました。

おにーちゃんが手首をつかんだ後はどうなるの?!

その?海羽を抱きしめる

その?おばーちゃんと勘違いして甘える

その?勢い余ってKISS!?

いや、悪ふざけが過ぎました。

?と?は、そのあとが気不味すぎるような。

まあ、どうなるかわかりませんw

疲労困憊。

えっ…？

おにーちゃんが私の手首をつかむ。

かなり強い力で、しっかりと固定される。

「痛いよ、おにーちゃん…」

呼んでも返事が来ない。

おにーちゃんのさらさらした髪が揺れる。揺れる。揺れる。

そして、ベットから転げ落ちた。

「うわっ！！」

今まで腕一本で自らの体を支えていたため、床にどさりと倒れた。

「え？え？何？どーしたの？」

やばい、私今めっちゃ混乱してる。

とりあえず落ちたまま動かないおにーちゃんをベットに戻そうと思うが、力が入ってない人間を持ち上げることは細い海羽^{みう}には難しく上半身すら持ち上げられない。

気が付くとおにーちゃんは肩で息をしていた。

「大丈夫…夫？」

おにーちゃんの頬に触れる。

…熱いかも

いそいでリビングから体温計を持ってきて床に寝かせているおにーちゃんに刺す（あまりの勢いで行ったため刺すという表現でも間違いない）。

ピピッという電子音とともに海羽は体温計を見る。

38・6℃

これから上がってくるかなー。

とにかく氷枕とか布団とかやらなきゃいけないわけだから準備はし

ておこうと思い、部屋を出ようとした時だった。
がさつと衣擦れの音が聞こえた。

「海羽…、寝てれば治るから」

何を言っただこの男は。

昔から体が弱かったおにーちゃん。

今ではそんなに熱を出すこともなくなったけど、ここ最近忙しかつ
たんだから発熱してもおかしくないい。

なんで気づかなかったんだろう。

悔やんでも悔やみきれない。

私はおばーちゃんの時もお世話になったお医者さんに電話してみた。

「はい春崎医院です」

「もしもし、六番街の、」

「ああ、海羽ちゃん？ お久しぶりー、で、今日はどんな用件で？」

「おにーちゃんが熱出しちゃって…」

「あら、ほんとに久しぶりだ…何度くらい？」

「38・6℃です」

「それはそれはよかったわね」

「いや、よくないですよ」

「そうかしら、人間少しくらい異常がないとそっちのほうが大変よ」

「そんなことどーでもいいです」

「はいはい、今からそっち行くから」

「ありがとうございます」

「罹^{りお}麻くんにはおとなしく寝ててもらって」

「はい！」

「んじゃ、後程」

そう言っただチャリと切れてしまった。

おにーちゃんの部屋に戻る。

おにーちゃんはベットに戻っていた。

どうやら自力で戻ったらしい。

布団はもうかける体力が残っていなかったらしい。

少しだがこの短時間で悪化している気がする。

早く春崎先生に来てもらわないと。

焦る。

本当に焦るべきはこっからどーするかなんだが。

その理由は…

「遅くなったわね!!」

その理由は治療方法に若干疑問はあるが凄腕の医師、春崎梢先生の登場だった。

疲労困憊。 (後書き)

うーん、うーん、春崎先生に関してはもう少し男っぽくても良かったかな…と思っています。

嵐の到来。

彼女はこの町唯一の医者である。

もともと都市部で働いていたのにこの地に配属されたいらしい。

まあ、彼女の性格からして都市で働くにははっちゃけすぎている、と思う。

言っていないか悪いかわからないが、春崎先生は凄腕の医者だ。

どんな病気でも治してしまうといっても過言ではない。

しかし、その治療方法がどうしても受け入れがたいものなのだ。

風邪をひいた時は、つばつけときゃ治るわよ。といい、

骨折した時は、つばつけときゃ治るわよ、そんなの。といい、

ものもらいができた時は、つばつけときゃ治るわよ、それくらい。

このようになんでもつばをつければ治るという先生である。

実際はきちんとした薬を処方してくれるのだが、それも怪しい色をしている。

本人いわく私のつば入りだそうだ。

そんな先生が家にやってきた。

「どれ、病人はどこかいな」

楽しそうに微笑みながら真っ直ぐにおにーちゃんの部屋へ向かう。

どこか探しておきながら知っている。

先生はおばあちゃんかかりつけの医者でもあったから。

そもそもは幼いころ体の弱かったおにーちゃん専用の医者みたいな

ものだったけど、最近はおばあちゃんにつきっきりだったし。

部屋も忘れていると思っていた。

——もう脳みそはおばさんだと思ってたのに

「誰がおばさんだ、ガキ」

まるで妖怪のように心を読まれた。

おにーちゃんの部屋に着くと早速診察を始めた。

触る。

撫でる。

触れる。

なんていうか、エロくないか、この絵面。

「うん、喘息…かな」

「先生にしては自信なさげですね、っていうか触っただけでわかるんですか？」

「触ったっていうか、体温とか脈とか呼吸音とかそういった感じのを診てただけだ」

不思議。

触っただけ、ねえ。

なんかすごくムカツとする。

苛々して仕方ない。

先生は医者だから、そう言い聞かせるのに止まらない。
嫉妬という名の炎が私の中で燃えているのだろうか。

「そう苛立つな。別に捕って喰ったりしないわ、アホ」
心の中が筒抜けなもの、苛々する。

先生は大人だから簡単に流してくれるけど、友達同士になったら瞬間で嫌われちゃうのかな。

まあ、おにーちゃんが私のことを好きでいてくれればそれでいいけど。

「春崎先生には食われたくないですよ。もうおばさんじゃないですか。先生に食われるくらいなら海羽みうに食われるほうがましです」

「なんだ罹りお麻、お前起きてたのか？その割にはずいぶん安定した…」

「先生たちがうるさくて起きたんです」
おにーちゃんはかけっぱなしだった眼鏡を外してベットの脇に置いた。

長い睫がより一層きれいに見えた。

「まったく、人が寝てるのに騒がないでほしいよ。まあ、海羽は違う意味でずいぶん騒がしく看病してくれてるみたいだからいいけど

な」

そう言って笑いかけてくる。

っていうか、その笑顔が反則なんだよ！

「まあ、そんだけ文句たれる元気があるならそんなのつばつけときゃそのうち治るだろ」

春崎先生はそういつて薬だけ置いて帰って行った。

「ったく、あの人はどうしてあんなに騒がしいんだか」

「まあ、薬をくれたんだからいいじゃん」

私は先生から受け取った薬を開けてみた。

それは毒々しく、薬とは思えない黒だった。

嵐の到来。(後書き)

…文化祭や体育祭で全然書けなかった。
これからもがんばらんなくちや！

嵐の後の静けさ。

さて、春崎先生にもらった薬は例の如く色はおかしいながらも効いた。

不思議なくらい効いた。

そんなわけで俺は今、ベットの上でごろごろしている。

いや、実際のところはもう休まずに仕事をしたいくらいなのだが、海羽^{みう}に止められている。

海羽は俺を見張るようにずっとつきつきりで看病してくれている。

それは嬉しい、だけどやることやってほしい。

兄として言わせてもらおうと勉強してほしい。

そこまで真面目なことはしなくてもいいが少しは社会に溶け込む努力というか、適応力を付けてほしい。

なんでかっていうと、海羽もかなり春崎先生に近い変人っぷりで学校もめんどくさいとか言って行かなかったやつだ。

あの先生でさえ学校はきちんと通っていたのだから海羽にもしつかり通ってほしかった。

俺はそのころ通えなかったから仕方がないとして、通える人には通ってほしいと思ってもいいじゃないか。

実を言うと俺は4歳から学校のプログラムを受けていた。

だから日常生活においての不自由っていうのは一切ないのだが、やっぱり学校には通いたかったというのが本音だ。

別にみんなで群れてワーワーキヤーキヤーやりたいわけでもないが、友達の人や二人はほしかったと思う。

「おにーちゃん、薬効いた？」

海羽が聞いてくる。

俺としてはあの先生にあまりいい思い出がないのでぜんぜん効かなかったといいたいところなのだが、正直に言って、ものすごく効いているのでうそはつけない。

「ああ、よく効いてるよ、今すぐ仕事ができるくらいな」

若干嫌味っぽく言ってしまった、とおれは気にしたのだが：

「ほんとっ?! よかったあ…」

海羽はむしろ喜んでるみたいだった。

俺の風邪が治って数日。

「よっ、罹^{りお}麻。げんきになりましたか？」

まるで赤ちゃんに聞くような口ぶりであの変態医師が勝手に乗り込んできた。

「おかげさまで」

「あたしのこのつばのおかげだな」

先生は不敵に微笑み舌を出す。

「やめてください。つばがたれます。気持ち悪いんで今すぐその舌をしまってください」

先生は海羽を探すようにきよろきよろする。

「海羽なら買い物に行ってますよ」

「そう、ムラムラしたら困るからな」

「はい、ムラムラしたら：って、しませんよ!!」

「そうかしら？ 私は今の海羽ちゃんはとっても魅力的で食べたくなっちゃうのに」

「何言ってるんですか！」

「でも、間違って襲わないようにね」

「自信はありませんが善処します」

「あらあら、自信無いの?! だっさ、兄貴として」

「すみませんね」

先生はそれだけ言うとそのくさと帰り支度を始めた。

「もう、帰るんですか？」

「うん、今日はあるたの様子見だから、じゃっ」

そう言って帰ってしまった。

なんか、一人じゃさみしいな…。

嵐の後の静けさ。 (後書き)

彼を部屋で一人にしてみたのですが、なにしか楽しそうです！
っていうか、海羽は家事できるのかな？
全部やってもらってそうだけど。

だから、私のせい…。

あんたのせい、っていうか私以外のみんなのせい。

私を置いて逃げたみんなのせい。

そんなのもわからないの?!

じゃあさ。

私の背中に負った傷はあんたの心の傷なんかより、もっと鮮明に痛みが伝わるってわかる?

ねえ、わかる?

わからないよね。

おにーちゃんがないのをいいことに、服を脱いで見せてあげたのを思い出す。

後ろで息をのむ声が懐かしい。

学校の火事。

それは幼いあたしが学校を怖くなるのには十分な理由だった。まして、だれにも助けられなかったなんて。

八年たった今謝りに来たのは、見かけたから。

そんなのって、あり？

だから、もう帰って。

私は親友に対してなんてことを言ったのだろうか。

まあいっか。

どうせ終わったことだし。

だから

あんたのせい、っていうか私以外のみんなのせい。

私を置いて逃げたみんなのせい。

そんなのもわからないの？！

なんていうセリフが出てきたのかな。

それにしてもあのタイミングでおにーちゃんが帰ってくるなんて。
なんていうか、もう。

私はバカ？

私のせいじゃない。

もう、弁解の余地もないほどに。

親友って言っても、名前すら出てこなかったけど。

自嘲気味に笑ってみた。

私はおにーちゃんに抱きしめられたまま考える。

いや、泣いていたから無心かもしれない。

とにかく、泣きたかった。

あの子はなんだったの？

いきなり私を乱して逃げてって。

ほんと何様？

しゃくりあげる私はおにーちゃんと初めて会ったころより幼かったかもしれない。

最後に言われたあの言葉。

私を傷つけるためだけの言葉。

鋭くとがったあの言葉。

おにーちゃんも聞いていたはずなのに。

何と思わないのだろうか。

あんたのうちは親がいないから、こっちの気持ちも分かんないのよ！！

あの子の絶叫に近い声は、私たちに刺さったはずだ。

なのになぜ？

そう聞いてしまった。

聞いてしまったから答えたおにーちゃんも、そのあと後悔してたよ
うだ。

私の顔に出ていたのかもしれない。

ごめんなさいって感情が、出てたのかもしれない。

語り始めは、明るかったのに。

「俺はさ…

だから、私のせい…。(後書き)

なんかぐだっぐだですみません。

おにーちゃんの過去

「俺はさ、学校に行けてないんだよ。前におばあちゃんと俺が話してるの立ち聞きして他の知ってるんだぞ……。小っちゃいころに逃げ出して、やっとここにたどり着いた時にはもう学校なんて手続きすらさせてもらえない、つーかこの住人としても扱ってもらえないんじゃないかな、そんな境遇でさ。はっきり言って今でも後悔してるんだ。まあ、言ってもわからないかもしれないけど。海羽はさ、まだ間に合うんだよ。それでも行きたくなかったら行かなくていいけど、行ったほうがいいと思ってるんだ。火事……はまあ、怖いと思うけど、頑張ってるほしいんだよ。そうはいってもわかんないかもしれないけど。俺の人生で嫌だったことベスト3言ってるよ。まずベスト3。俺がまだ小っちゃかったころのことだ。父さんと母さんにさ、捨てられたんだよね。研究材料としてそこそこの有名な大学にね。まあ、そこで英才教育だか何だかしらないけどわけのわからない国の言葉聞かされて、食事すら毎日決まったメニューなの、笑えるよね。でさ、さっきの話の続きになるけど、逃げたんだ。そこから。そんときに春崎先生も手伝ってくれたんだ。え？ 本当だよ。あの時の先生は若かったな。そうそう、それでやっとここに着くんだ。じゃあ、ベスト2。これは海羽が火事にあつたとき。あのときは俺すっごく焦ったんだよね。病院で春崎先生がすっげえ深刻な顔してて……すっげえ不安でさ。海羽に何があったんだろうってもう不安で不安で仕方なかった。だから一晩ずっと部屋の前でうろうろしてたんだよ。知ってた？ 知らないか、寝たもん。あの後海羽から火傷の跡見せてもらった時はすっげえ嫌な気分だった。で、ベスト1だけど、これは……今かな。海羽が昔の友達に泣かされてんだもん。見てらんねえよ、もう。だからこうしていま、海羽を抱きしめて話してんだ……。まあ、俺も逃げてるだけなんだよさ」

おにーちゃんはここまで話すとそつと目を閉じて私の目尻にキスを落とした。

それは泣きはらした私の目には優しくでもちよっぴりしみる消毒液になった。

至福の瞬間

あのあとおにーちゃんと一緒にご飯を作って食べた。

その間中髪を撫でてくれたり、抱きしめてくれたりした。

まるでストッパーが外れたみたい……。

私は嬉しくて仕方なかった。

今まで何も大事なことを話そうとしてこなかったおにーちゃんは、やっと私にいろんなことを話してくれて、私の至らない部分までちゃんと受け止めてくれた。

おばあちゃんにもあんな緩みきった笑顔見せなかったかもしれない。それくらい安心できる居場所を見つけられた。

やっと、見つけた。

「海羽^{みう}、あのさ」

それはご飯中のことだった。

私はその真剣な表情を見て何事かと思った。

それくらい真剣だった。

「俺さあ、今まで海羽になんも話してこなかったこと今更後悔してんだけどさ。これからはおたがいはなしていかないか？そのほうがおばあちゃんも安心できるだろうし」

おばあちゃんが安心できる。

これは私に見事にクリーンヒットしたセリフだった。

「俺としてはもっと海羽のこと知りたいし、そのほうが安心できるし。いいだろ？」

よくねーよ。

くらっと来ちゃったじゃん。

私のこと知りたいって……、どんなセリフよ、それ！！

君のこと、もっと知りたいとかいうセリフって少女漫画でしか読んだことないよ？！

っていうか何で私？？

「ベベベベ、ッ別にいいんじゃないの？」

私はずっとちゃんと話してきてるし……。

あとからもぞもぞ喋った言葉は聞こえていないだろうが。

ああああ！！

もう、何で私こんなに赤面してるのよ！

「……なんでそんなにかみかみなんだ？」

面白そうに聞くおにーちゃんは私の心の内を覗いたようににやにやと笑っている。

つちつくしよー！ むかつく……。

にやにやしながら私の頭を撫でる。

すごく自然な行為でまるで今までずっとしてきたようにこなれている。

……こうやって頭撫でてあげる相手とか、いたのかなあ。

結構不安になる。

まあ、おにーちゃんにそんなのできたら私が一番に知ってるか。

自分の中で渦巻いている感情に驚く。

こんな風に誰かに対して思—————

「おい、き、兄弟間での不純異性交遊はダメだろ！……！！！！！！！！」

いきなりの大声とその内容に振り向く。

そこには目を真ん丸にして呆然と立ち尽くす春崎先生がいた。

「何で勝手に入ってきているんですか!？」

私とおにーちゃんの声が重なる。

ちよつと距離が近くなるみたいでうれしい。

「何でって、お前らの家から知らないやつが出てきたからちよつと外から様子うかがってたんだよ。そしたら不純異性交遊が始まって……」

いや、そんなことしてないし。

兄弟では抱擁さえも禁止なんですか、じゃあメロスたちはホモですか？

春崎先生はずいぶん古い考えをお持ちのようだが、スルーさせてもらう。

そもそもやましい感情なんてこれっぽっちもな、……。

訂正します。

これっぽっちどころか湧いてでる泉のようにありました。
すみません。

でもでもでも!

「はーん、先生、そこから見ていたのにどうして今まで入ってこれなかったんですか？」

おにーちゃんはまるで余裕といった表情で春崎先生に問いかける。

「恥ずかしかったんでしょう、先生が。俺らが仲良くしているのを見るのが。どんだけ初心なんですかねえ、せ・ん・せ・い」

あれ？

私のおにーちゃんってこんなに人を責めたり、要するにSでしたっけ？

疑問を抱えつつも私だって恥ずかしいので下を向いて黙っとく。

こっちのほうが安全だ。

さっきの続きに戻ろうか。

でも、私はおにーちゃんがおにーちゃんであることが好き。

たとえこの気持ち膨らんで抑えきれなくなっても、もう一つ気持ちをためておく容器を用意すればいい。

好きって言ったっておにーちゃんは今、私が傷ついてるからなくさめてくれてるんだし。

私は割り切った気持ちで笑う。

「おにーちゃん、そんな先生は放っておいてごはんたべよ！」

さて、私が好きって言ったらおにーちゃんはどんな反応するのかな？

心の中でほくそえみながらおいていたスプーンを拾う。

至福の瞬間（後書き）

さて、いい感じにまとまったので次は罹^{りお}麻でいきます。
あれ？

今日エイプリルフルじゃないのに嘘ついてる人がここ（ry
ではまたそのうち打ち込みます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9197w/>

空白のふたり

2011年11月24日17時58分発行